

知識の選択と解釈：

20世紀初頭マルクスに関する日本著作の中国語訳書をめぐる研究

Selection and Interpretation of Knowledge:

a Study on Chinese Versions of Japanese Books on Marx and His Theory at the beginning of the 20th Century

要旨

本稿は、マルクス学説伝来史の歴史的背景を基礎として、20世紀初頭における日本著作の中国語訳書で言及したマルクス学説に関する中国人訳者の知識選択・解釈をテキスト比較の視点から問題とするものである。

20世紀初頭は中国の清朝末期に当たり、中国人留日学生と在日中国学者の大活躍時期でもあった。彼等によって西洋の観念・知識に関する日本著作は大量に中国語へ翻訳された。そのような訳書は「清末漢訳日書」と呼ばれ、多くはマルクス学説に言及し、当時の中国知識人に大きな影響を与えていた。中国人訳者は漢訳日書の翻訳活動に重大な役割を果たし、ほぼ同時期の西洋宣教師と共に、中国におけるマルクス学説の最初の紹介者でもあった。当時、西洋の観念・知識は主に日本を経由し、中国に転入されたが、その転入の前に、日本著作の作者は既に西洋知識に対し日本式の選択と消化を行っていた。中国人訳者の翻訳活動も、単なる「知識の運び屋」だけではなく、日本著作の選択・理解・受容・消化を経験した結果、マルクス学説を中国語に転換し、中国人読者の前に展示された。漢訳日書の中で、訳書の翻訳品質・原作に対し誤訳・原作中マルクス学説に対し訳者の段落補充と段落削除・原作と離反した訳者の独自の主張などをめぐって、日本語原作と中国語訳書のテキスト比較分析の必要があると考えられる。さらに、20世紀初頭の中国人訳者はほぼ特定の学派に従属し、あるいは特定の政治立場を持っていた以上、彼等の訳書は日本原作者の思想だけでなく、自身の考えや主張も反映されていた。

本稿では、福井準造「近世社会主義」、村井知至「社会主義」、矢野龍溪「新社会」、田島錦治「最近経済論」、田島三郎「社会主義概評」などの日本著作とその中国語訳書を基つき、知識の源としての英文著作も参考し、20世紀初頭に於けるマルクス学説に言及した漢訳日書の中で中国人訳者の選択と解釈を次の3点に限って考察したい。

- (1) 中国語訳書の翻訳品質の基本考察
- (2) 中国人訳者にとってマルクス学説の重要性
- (3) 原作と離反した中国訳者の思考と主張

要するに、中国語訳書の訳文（特にマルクス学説に関する内容の訳文）の適確度、完成度と訳者の主観性、この三つの方面から、マルクス学説の東アジア伝来史を探ろうとする。

Abstract: At the beginning of the 20th century, Chinese students and scholars in Japan translated a large amount of western works from Japanese into Chinese, many of which mentioned Marx and his theory. These translations help the Chinese to get much more systematic understanding of Marx than ever. In this process, the Chinese translators play key roles. Before the new knowledge transferred from the West via Japan to China, Japanese scholars had screened and digested firstly. At the same time, the Chinese translators were also not simply "knowledge transfers", the versions they